

松下幸之助・透徹の思想（五）

—『新しい人間観の提唱』・幸之助哲学の確立—

青野豊作

I 「新しい人間観」の提唱

●原理研究から「新しい人間観」へ

松下幸之助は九十四年の生涯を通して、望ましい未来社会のビジョンと、そのビジョンを実現するための処方箋を追究し続けた。

その「実践思想家・松下幸之助」の歩みのなかで、もっとも注目されるのは戦後の昭和二十（一九四五）年から昭和四十年代（一九六五年）にかけての時期で、この二十余年は松下電器産業（現・パナソニック。以下、松下電器）が戦後苦難期を乗り越えて「世界の松下」へと大躍進した時期と重なっている。まず、この間の松下電器の歩みからみていこう。

松下電器の社史—『松下電器五十年の略史』

は、この二十余年を次の四つに時代区分している。

(1)「戦後苦難の時代」—昭和二十年～二十五年。

(2)「新しい建設の時代」—昭和二十五年～三十年。

(3)「飛躍的發展の時代」—昭和三十一年～三十六年。

(4)「世界的躍進の時代」—昭和三十六年～四十三年。

付記すると、この松下電器の戦後復興と世界的躍進の時代は、そのまま「東洋の奇跡」とされた日本経済の戦後復興と躍進の時代でもあった。

他方、この間の松下幸之助の歩みにもめざましいものがあつた。

松下幸之助と松下電器は、小稿（一）でみ

たように昭和二十一年からの数年間、松下幸之助に対する財閥家族の指定、公職追放の指定、さらに松下電器に対する持株会社の指定、経済力集中排除法の指定（制限会社指定）その他の、いわゆる「七つの凍結・制限令」で身動きもままならぬ状態へと追い込まれていた。しかし昭和二十七年（一九五二）年一月の賠償工場指定の解除を最後にして、すべての束縛から解放された。そしてその少し前の時点から経営の第一線に復帰した松下幸之助の舵とりのもと活動の場を世界へと広げているが、それは松下幸之助個人の歩みと重なっていった。

なかでも注目を要するのは、戦後の二十余年の間に、三ヵ月に及んだ第一回欧米視察（昭和二十六年一月～四月）をはじめとして数回に及んだ欧米視察で見聞を広めていること

である。このことが『実践思想家・松下幸之助』の思索をより深めることにもなるのである。それで同じく昭和四十年代に、もう一つのやはり重要なことがあった。

昭和四十七（一九七二）年八月。松下幸之助が七十七歳の時のことである。松下幸之助はP H P 研究所から新著書『人間を考える―新しい人間観の提唱』（注・松下幸之助は計四十五冊に及んだ著書の中で、本書を主著としている）を上梓しているのである。

本書『人間を考える―新しい人間観の提唱』は、松下幸之助がすでに二十余年前に発表していた一連の著述を下敷きにしたものであった。一つは、月刊P H P 誌（昭和二十四年七月発行号―二十八年十月発行号）に計三十四回にわたって執筆・連載した「P H P の原理」についての一連の論考（前号の小稿参照）。もう一つは、その「P H P の原理」についての論考を下敷きにして同じく月刊P H P 誌第五十号（昭和二十六年九月一日発行）で発表した『人間宣言』（P H P のことば・その三八）である。

昭和四十七年八月に上梓した『人間を考え

る―新しい人間観の提唱』は、それらの一連の著述を発表したあと、松下幸之助がさらに二十余年にわたって思索を重ねた歳月の末に得た「人間観」を改めて「新しい人間観」として発表したものであった。

この間の経緯が興味深い。

●第一稿―『人間宣言』への批判

まず、松下幸之助が月刊P H P 誌第五十号（昭和二十六年九月一日発行）で、『人間宣言』を発表した時のことである。月刊P H P 編集部は「各界知識人の批判を仰ぎたい」とする、松下幸之助の要望あつてのこととみられる、各界の知識人、二十人に『人間宣言』を批判する原稿の執筆を依頼している。次いで寄せられた、それらの批判文を月刊P H P 誌第五十二号（昭和二十六年十一月一日発行）で、『人間宣言を批判する』と銘打った特集を組んで紹介（注・その一部を第五十三号でも続編として紹介）している。

その内容である。

『人間宣言』の理論的欠陥とその独断的な見解を手厳しく、かつ辛辣そのものに批判した、

* 批判文が数多く寄せられているのだ。いくつか抜き出してみよう（抜粋。一部の字句を改訂。括弧内は引用者）。

※松下幸之助が昭和四十七年八月に稿を改めて発表した、『人間を考える―新しい人間観の提唱』にも各界の著名人が寄稿した数多くの感想文が収録されている。ただし、それらは例外なく、お座なりの、賛辞めいた内容のもので紹介に値するものではない。

他方、『人間宣言』について寄せられた批判文は、いずれも真正面から取り組んで内容を分析・批判していて、当時の知識人らの真摯な生き方をいまに伝えてもいて興味深いものがある。付記すると、彼らの容赦ない批判が「内省の人・松下幸之助」をしてその後二十余年に及んださらなる思索の歳月へと導いてもいる。

「編集者から本誌第五十号巻頭の『人間宣言』を批評せよとの命であるが、これを批評することは松下氏の宗教思想を論ずることだ、とわたしは考える。

『人間宣言』にあらわれた、宇宙の支配者、万物の王者、自然の理法、神の意志、人間に与えられた天命、人間の偉大などという

数々の言葉を通してうかがわれるものは、松下氏の知性でなくして、氏の宗教的精神である。本質的に宗教的なものである。

松下氏はそれをすこぶる論理的な単純さをもって、また、それだけに徹底した形で、疑^ぎをゆるさぬよう（注・論調で）書きつらねておられるため、ついてゆきにくいという思いをする読者も多いのではないか。また、その宇宙観は人間的な自己中心説がその基礎となっているが、それは宗教思想として幼稚にすぎ、人間を謙虚ならしめ、敬虔な心にみちびくべき現代宗教の本質的契機^{※おおくまのふゆき}を欠いていると思われる——大熊信行（経済学博士）。

※大熊信行 一八九三—一九七七年。大正・昭和期を代表する経済学者の一人。教育・文化・社会評論の分野でも活躍し、舌鋒の鋭さで知られた。著書に『経済本質論』『戦争責任論』『国家悪』ほか。月刊PHP誌は、大熊の批判文を貴重とし、二号にわたって掲載している。

『人間を考える——新しい人間観の提唱』のもとなつた、第一稿——『人間宣言』の最大

の特色は、「人間を『偉大なる王者』と認識する」としたところにあつた。これはのちに詳述するように、日本仏教の人間観を真つ向から批判し、かつ否定したものであつた。それゆえのことであろう。『人間宣言』を宗教的な色彩の濃いものとして受け取った人たちが多く、そのこと自体を批判した人たちも少なからずいた。

●反省、そして二十余年の思索へ

前掲の大熊信行の批判文はそれらを代表するものであつた。他方、『人間宣言』にみられた独断的見解に生理的に強く反発した人たちも少なからずいて、こちらは怒りの感情をもあらわにした批判文を寄せている。いくつか抜き出してみよう（抜粋。一部の字句を改訂。括弧内は引用者）。

「人間宣言はまことに立派です。しかし宣言というところにこだわりすぎているためか、いささか調べが高すぎます。これはむやみに張りあげた声を感じさせる調べの高さです。一応もつともらしくひびいても、

しんみりと迫る力はというと意外に弱い。つまりPHPの人間宣言は、威勢がよすぎて人間の真実にふれていません。もう一度ねり直して、もつと細かい感情をもつたものにしていただきたい——内藤濯^{あづ}（仏文学者）。

「この『人間宣言』ほど、端的に現代的迷信を大胆に表白したものは稀であろうと思います。人間には宇宙を支配する力があるとか、権能があるとか、（人間は）神の代行者であるとか、まことにその思い上がった小ざかしさ、浅薄さ。鼻持ちなりません——伊福部隆彦^{いふくべ}（評論家）。

「『人間宣言』はあまりにも批判の余地が多いように思われる。

①『生成発展は自然の理法であり』とあるが、生成の半面には死滅があり、発展の裏面には衰退があり、綜成的に見ればただ生滅変化あるのみである。

②『人間には』この宇宙を支配する力がおのずから本性として与えられている』と

ある。しかし妥当的、普遍的な世界観に裏づけられないかぎり、このような人間本位の思い上がった考え方は所詮、一種の『独我論』たるを免がれない。

③『宇宙一切のものが人間に奉仕し、その繁栄に役立つべく待機する』というのは、驚き入った論理の大飛躍であり、おそろしい自己陶醉的独善である。

④『衆知』の強調は民主主義的精神と一致するようでもあるが、人間本位の独我論から出発した功利的衆知は、人間本位がやがて自己本位ないし自国本位に転質し、利害の相反するところから衆知の分裂をまねき、激烈酷薄なる闘争となり戦争となるのは不可避である。

⑤人間のための、ただ人間社会のみに限られた民主主義はあまりに御都合主義的であり、あまりにも不徹底であり、極言すればあまりにも反民主主義でさえある——江部鴨村(宗教評論家)。

むしろ、他方で控え目な表現で『人間宣言』の主旨に賛同の意を表した声も寄せられてい

た。しかし、それらの人たちもまた半面で松下幸之助の独善的論考を批判する文言を付記してもいた。

松下幸之助としては大いに反省を要するところである。そして事実、彼は批判の声に素直に耳を傾け、自らの論考を省みてもいる。そして、そのうえで改めて思索を重ねること二十余年……。前述のように昭和四十七(一九七二)年八月に稿を改めて『人間を考える——新しい人間観の提唱』を発表しているのだが、それはなにゆえのものであったのか。ここで再度、発表するに至った経緯もみておこう。

●なぜ「新しい人間観」を提唱したのか

松下幸之助はまず、次のように述べている(『人間を考える』——PHP文庫版・一九九五年一月刊。「まえがき」より抜粋。傍点、括弧内は引用者)。

「終戦直後の、あの混乱した悲惨な世の姿をまのあたりにみて、やむにやまれぬ思いから、昭和二十一年十一月三日にPHP研究所を創

設、爾来二十余年、断続的ながら(注・昭和二十五年にPHP研究所はその活動を『PHP』誌発行のみにとどめて研究活動を一時中断している)今日まで、(PHP理念と活動について)さまざま高見を拝聴し、あるいは『PHP』誌を通じて多くの諸先生や読者の方がたのご意見もいただいてまいりました。

そうした(二十余年の思索の歳月の)なかから、知らず識らずのうちに、(新しい)一つの人間観というものがまとまってきたのです。そういった人間についての一つの考え方をのべることも、それはそれなりの意義もあり、また何ほどかはお役に立つ点もあろうかと考え、昭和四十七年八月、これを『人間を考える——新しい人間観の提唱』としてご高覧に供した次第です」

次いで巻頭に提示した「提唱文」(主文——四二―四三ページ参照)を補足した一文——「序章 なぜ『新しい人間観』を提唱するのか」の中で、次のように述べている(抜粋。傍点、括弧内は引用者)。

新しい人間観の提唱

宇宙に存在するすべてのものは、つねに生成し、たえず発展する。万物は日に新たであり、生成発展は自然の理法である。

人間には、この宇宙の動きに順応しつつ万物を支配する力が、その本性として与えられている。人間は、たえず生成発展する宇宙に君臨し、宇宙にひそむ偉大なる力を開発し、万物に与えられたるそれぞれの本質を見出しながら、これを生かし活用することによって、物心一如の真の繁栄を生み出すことができるのである。

かかる人間の特性は、自然の理法によって与えられた天命である。

この天命が与えられているために、人間は万物の王者となり、その支配者となる。すなわち人間は、この天命に基づいて善悪を判断し、是非を定め、いっさいのものの存在理由を明らかにする。そしてなにもものもかかる人間の判定を否定することはできない。まことに人間は崇高にして偉大な存在である。

このすぐれた特性を与えられた人間も、個々の現実の姿を見れば、必ずしも公正にして力強い存在とはいえない。人間はつねに繁栄を求めつつも往々にして貧困に陥

「ここで、この『新しい人間観』を提唱する、いいかえれば人間の本質を考えていく上での基本的な考察法というものについてふれておきたいと思います。

人間の本質については、すでにこれまでに過去何千年にわたって幾多の先人がいろいろと考えられ、さまざまなかたちでこれをのべておられます。そして、今日お互いは、それらを各種の文献記録によって知ることができます。しかし、(私が今回、提唱したところの)この『新しい人間観の提唱』は、そうした諸文献を通読し、これを取捨選択して、まとめたというものではありません。

もちろん、それら(の諸文献)は人間の幾世代にもわたる衆知の所産ですから、これを参考としつつも、より基本的には、人間発生以来今日までの人間の営

み、(私が独自の視点をもって)洞察し、その中から人間の本質というものについて(私が)考察推知して得たものです。(中略)ここに提唱した『新しい人間観』は、そのような(私の)考察によって得られた人間観をのべたものです」

そして、次の言葉をもって序章を結んでいる(括弧内は引用者)。

「最後に重ねて申しのべたいことは、この『新しい人間観』によって一つの人間観を提唱することの趣旨は、人間生活の上に、物心ともにゆたかな調和ある繁栄、平和、幸福(注・『物心一如の繁栄』——PHPの基本理念。前号の小稿参照)を逐次実現させていくというところにあります。

このような人間観にもとづいていっさいの活動を営んでいくならば、人間の幸せもより高まっていくであろう、いいかえれば、この人間社会からできるかぎり不幸とか争いを少なくし、平和と幸福を招来していきたいという願いに立つて提唱したもののなのです」

り、平和を願いつつもいつしか争いに明け暮れ、幸福を得んとしてしばしば不幸におそわれてきている。

かかる人間の現実の姿こそ、みずからに与えられた天命を悟らず、個々の利害得失や知恵才覚にとらわれて歩まんとする結果にはかならない。

すなわち、人間の偉大さは、個々の知恵、個々の力でこれを十分に發揮することはできない。古今東西の先哲諸聖をはじめ幾多の人びとの知恵が、自由に、何のさまたげも受けずして高められつつ融合されていくとき、その時々々の総和の知恵は衆知となつて天命を生かすのである。まさに衆知こそ、自然の理法をひろく共同生活の上に具現せしめ、人間の天命を發揮させる最大の力である。

まことに人間は崇高にして偉大な存在である。お互いにこの人間の偉大さを悟り、その天命を自覚し、衆知を高めつつ生成発展の大業を営まなければならない。

長久なる人間の使命は、この天命を自覚実践することにある。この使命の意義を明らかにし、その達成を期せんがため、ここに新しい人間観を提唱するものである。

昭和四十七年五月

松下幸之助

前掲の第一稿——『人間宣言』の論考の欠点は、大きく分けて二つの点にみられた。

一つは、松下幸之助の「物心一如の繁栄」への思い込みが激しく、それがゆえに論考も先走りしたかたちとなり、緻密性を欠く面があったことである。これがために宗教思想用語と政治用語が混在し、それがまた断定的な表現と相まって説得力を弱めてもいた。

二つに「人間の本質」についての考察も未熟で、それがために、これまた断定的な表現と相まって読む人に違和感を与え、さらに生理的な反発をも生むことにもなっていた。

他方、稿を改めて発表した「新しい人間観」は第一稿の『人間宣言』に比べて、より慎重な表現に終始したものとなっている。

ここではその内容をみる前にまず、発表時の松下幸之助の意気込みを示す恰好のエピソードを紹介しておこう。

●幸之助が命と魂をこめた一冊

松下幸之助の新著書——『人間を考える——新しい人間観の提唱』の初版本（昭和四十七年八月、PHP研究所刊）が発売される直前のことである。松下幸之助は、松下電器の役員らに見本刷りとして出来上がったばかりの著書を見せ、感想を求めている。

その時の松下幸之助の言動が興味深い。

当時、松下幸之助は七十七歳。松下電器会長のポストにあった。松下幸之助の名は国内はもとより海外でも広く知られていた。米タイム誌でカバーストーリー＝特集として大きく報道された（一九六二年二月二十三日号）のに続いて、米ライフ誌（一九六四年九月号）、フランスの雑誌その他でも大きくとりあげられていて、当時すでに「日本を代表する人物」として海外でも広く知られていたのである。もちろん、国内では「経営の神様・松下幸之助」は子供たちの間でさえも広く知られる存在だ

った。

その松下幸之助翁が、である。松下電器の役員らに新著書——『人間を考える——新しい人間観の提唱』の見本刷りを見せ、読後感を求めた時に年端もゆかぬ少年さながらの様子をみせているのだ。いうなら会心作の作文を母親に読むようにせがんだ時の、小学校低学年の児童そのものの言動をみせているのである。「読んでどうやった。君、どう思う」と、せっかちそのものに感想を求めているだけでなく、翌日再び感想を求めるといったぐあいだった。

木野親之（松下電送機器社長ちのめ当時）もまた母親代わりの役（？）を務めた一人だった。その回想談がおもしろい。

木野親之は、次のように語っている（PHPゼミナール特別講話集『続・松下相談役に学ぶもの』——昭和五十三年三月二十五日談より抜粋。一部の字句を改訂。括弧内は引用者）。

「相談役（注・昭和四十八年七月、七十八歳の時に会長を退き、相談役に就任）は、いろいろの本をPHPから出しておられます（注・計

四十五冊）。そのたびに本をいただいて、『君、暇な時にこの本読んどいてや』とおっしゃるわけです。

『人間を考える』の本を出された時に、私は非常に厳肅な気持ちに打たれたのです。やはり『これつくったんや。これ出そうと思うんや。読んでくれ』と。私は（いつものように）後でゆっくり読めばいいと思ったが、（相談役は）『前書きやねん』と言って（本のページを）あけられて『この前書き、読んでんか』と。それで私が読んでいる間、ジーンと座って待つておられた」

「そこを読み終えると、『新しい人間観の提唱』のところ読んでんか。これ八百字やねん」と、こうおっしゃる。そして私が読み終わるまでジッと待つておられて、『君、どう思う。読んでどうやった』と。あくる日また電話がかかってきて『どうやねん、どうやった』と。まあ、何と申しますか（松下幸之助の真剣そのものの様子を目のあたりにみて）、もうことばに表わせない厳肅なものを感じたわけです」

そして、次のことばで締めくくっている（傍

点、括弧内は引用者）。

「その時、私は『人間を考える』という、この本に相談役は命をこめておられるな、魂をこの中にこめられているな、と。この八百字（注・『新しい人間観の提唱』の提唱文——正・八百七十四字。別掲）の中に、相談役の哲学の集大成がなされているな、と。肝心かなめのものは、この中に全部入っておるな、という感じがいたしました。この本を読んで、松下相談役という方が（初めて深く）理解できたような気がしているのです」

再録する。木野親之は『人間を考える——新しい人間観の提唱』を松下幸之助が「命と魂をこめて著述」した文字通りの渾身の著書で幸之助哲学を集大成した著書でもあるとしているのである。他方、松下幸之助自身もまた、前述のように計四十五冊を数える著書の中で第一にあげるべき一冊——主著としているのである。では、それはどのような内容のものなのか。次に、改めてみていくことにする。

II 幸之助哲学の確立

●「新しい人間観」―特異点と注目点

ここではまず、『人間を考える―新しい人間観の提唱』の構成からみていこう。それは一般の図書のものとは大きく異なっていて、巻頭に「提唱文（主文）」（正・八百七十四字、四二―四三ページに掲示）を掲げ、その提唱文を七章から成る解説文で補足・解説するという構成、つまり判決文に近い構成となっている。

- ・主文 「新しい人間観の提唱」
- ・序章 なぜ「新しい人間観」を提唱するのか
- ・第一章 宇宙というもの
- ・第二章 宇宙と人間との関係
- ・第三章 人間の天命とそれを生かす道
- ・第四章 長久なる人間の使命
- ・補章一 人間の共同生活の意義
- ・補章二 衆知による日本のあゆみ

ちなみに、この構成は二十余年前の、昭和二十六年九月に発表した第一稿―『人間宣言』にみられないものであった。『人間宣言』は、今回改めて発表した『新しい人間観の提唱』の提唱文とはほぼ同じ主旨のことを述べたものであったものの、補足解説が殆どなされておらず、それがために唐突に独善的な見解を押しつけるかのようなものと映るものとなっていた。

説得力を欠き、読む人に生理的反発をも抱かせる結果となったゆえんであった。他方、『人間を考える―新しい人間観の提唱』は、まず、まえにみた「序章 なぜ『新しい人間観』を提唱するのか」という一文をもつて提唱者・松下幸之助の意図を明らかにしているように、提唱文が独善的な見解の押しつけと受け取られないように十分に配慮した構成となっている。さらに、続く補章を含めて六章から成る補足解説文の論考でも同じ配慮がなされている。

松下幸之助は、悲願とする「物心一如の繁栄社会」を実現するためには、まず、「人間の本質」を明らかにし、正しく認識する必要

があると考えていた。

さらに、その人間の本質を明らかにするには、その前にまず、人間と万物いっさいを含めた宇宙全体について考察する必要があると考えていた。それで「第一章 宇宙というもの」で、宇宙の本質、それも松下幸之助が独自の視点から考察・推知して得た宇宙の本質から説き起こしているのだが、その論考のすすめ方にも特徴がみられる。

まず、「宇宙の本質」論―第一章―から、「宇宙の本質にもとづく人間の本質」論―第二章―へと論考をすすめている。次いで、そのうえで「人間の天命」（第三章）と「人間の使命」（第四章）を解き明かし、さらに「人間の在り方」（補章一）と、「日本及び日本人が目指すべき未来社会のビジョンと、そのビジョンを実現するための基本についての論考」（補章二）へと、順序を追ったかたちで論考をすすめている。

この論考のすすめ方は、小稿（三）でみた松下幸之助ならではの「四諦論思考」と「五段階思考」を基本としている。それでも一つ付記すると、『新しい人間観の提唱』につ

いての論考には、もう一つの、きわだった特徴がみられる。

●「新しい人間観」と「繁栄の哲学」

すべての論考を、「幸之助哲学＝繁栄の哲学」と、その幸之助哲学を基盤とした「繁栄によって平和と幸福を」とするPHPの理念、すなわち「物心一如の繁栄を目指す」とするPHPの基本理念を軸にしてすすめているのである。

当然のこと、松下幸之助は「人間の本質」を肯定的にとらえている。同時にまた、「天地自然の、いっさいのものを容認する」として、現世（この世。現実の世界）を全面的に肯定してもいる。しかも、この点に関してはかたくなまでに自説を強く主張していて、それが序章から補章二の、全七章から成る提唱文の補足解説文に共通してみられる、きわだった特徴となっている。

『新しい人間観の提唱』の提唱文（主文）が別掲にみるように、松下幸之助ならではの人間観——人間賛歌を高らかにうたったものになったゆえんだった。それでこれに関連して、

もう一つ見落としてはならないことがある。ほかでもない。

実は、松下幸之助ならではの人間観——人間賛歌の基盤となっている「幸之助哲学」（繁栄の哲学）は、小稿（四）でみたように松下幸之助が僅か九歳、小学校四年生の時に貧困ゆえに一家が離散へと追い込まれたという、哀しい人生の原体験を原点としているのだ。

その原体験から最初に生まれたものは、絶望感と貧困への激しい憎しみであったはずだ。さらに貧者、弱者をかえりみない社会システムの未熟さと、世の理不尽に対する激しい怒りであったはずだ。

しかし、松下幸之助は人生体験を重ねる歳月の中で、貧困への憎しみと世の理不尽に対する怒りを消して、やがては「人はだれしも、もともと繁栄の社会を築き上げる能力を有している」と考え、認識するようになっていく。さらに昭和二十一（一九四六）年十一月三日に、PHP研究所を創設した時点には、その思想を「人類の平和と幸福」を繁栄の基盤とする、PHP理念へと発展させてもいる。

再録しておこう。松下幸之助は、PHP研究所を創設した時に、『PHPの綱領』を次のように定めているのである。

▼綱領

『天地自然の中に繁栄の原理を究め、進んでこれを社会生活の上に具現し、以て人類の平和と幸福とを招来せんことを期す』

ちなみに、綱領にいう「繁栄」は「物心一如の繁栄」すなわち物質面での豊かさ、精神・心のゆたかさが一体となった、真の繁栄をさす。また「平和」は、すなわち「戦争のない世界」をさす。

松下幸之助は物的生活と心的生活との間にギャップが生じた時に世の乱れが生じ、さらに人びとを戦争へと駆り立てるとして、そのうえで「幸福は、繁栄と平和の二つを基盤としている」と指摘しているのだ。

長 幸男（専修大学教授当時。二〇〇七年没）が編集・解説した『実業の思想——現代日本思想大系11』（一九六四年・筑摩書房刊）の中

で、「松下幸之助のPHP理念(繁栄の哲学)」は、かつてどの思想家にもみられなかったスケールのもので、かつ、創造性に富んだダイナミックさでも類をみないもの」と指摘しているゆえんでもある。それで話を『新しい人間観の提唱』へと戻すと、それは長幸男が指摘した通りのものといえる。

●「新しい人間観」―五つの主題

『新しい人間観の提唱』の提唱文(主文)は、別掲にみるように八百七十四字から成るものである。また、文章も一見、平易にも映るものである。しかし、そのごく短い文言の中に盛り込まれているものは途方もない広がりや深い意味をもっている。

改めて内容をみよう。提唱文(主文)は大きく区分すると、「新しい人間観」について記述した前段の部分と、その人間観を再認識したうえで生き、実践することの大切さを説いた後段の部分から成っている。うち、前段の部分からみていこう。

前段の部分は、次の五つの主題から成っている(注記※引用者)。

※「宇宙に存在するすべてのものは、つねに生成し、たえず発展する。万物は日に新たであり、生成発展は自然の理法である」

※「宇宙」―ここでは「秩序ある統一体としての世界」の意。「生成」―物が生じること、また生じさせること。「発展」―盛んになり、広がること。「自然の理法」―人や物の本来の性格・本性。道理にかなった正しい法則。松下幸之助は「自然の理法とは、天の道と考えてもいいし、神と考えてもいい」と別記している。

『人間には、この宇宙の動きに順応しつつ万物を支配する力が、その本性として与えられている』

※「支配」―これについて「人間を考える」は〈注記〉で次のように記述している。

「支配・君臨する」ということは、自然の理法にもとづいて、万物に順応するということです。いいかえれば万物に従いつつ万物を導き生かすこと、これに徹することが、支配・君臨するということです」

※「本性」―生まれつきの性格。天性。本来の性質。(本性)ともいう。

※「人間は、たえず生成発展する宇宙に君臨し、宇宙にひそむ偉大なる力を開発し、万物に与えられたるそれぞれの本質を見出しながら、これを生かし活用することによって、物心一如の真の繁栄を生み出すことができるのである」

※「君臨」―前項の注記参照。「物心一如の繁栄」―前出。

『かかる人間の特性は、自然の理法によって与えられた天命である』

※「自然の理法」―前出。ただし、ここでは人間を含むいっさいのものを生み出した「宇宙根源の力」神の力の働き[※]の意も。松下幸之助は宇宙に存在するいっさいのものと法則を宇宙根源の力[※]神の力が生み出したものと認識していた(前号の小稿参照)。「天命」―生まれた時から定められている運命。ここでは「人間の使命」の意も。

『この天命が与えられているために、人間は万物の王者となり、その支配者となる。すなわち人間は、この天命に基づいて善悪

を判断し、是非を定め、いっさいのものの存在理由を明らかにする。そしてなにもものもかかる人間の判定を否定することはできない。まことに人間は崇高にして偉大な存在である』

※「万物の王者」——これについて『人間を考える』（PHP文庫版・一九九五年一月刊）は次のように注記している（括弧内＝引用者）。『この「新しい人間観の提唱」においては、ややもすれば弱いものと考えられている人間（注・仏教の人間観——後述）を、「偉大な王者」として認識しようとするものです。したがってここでは、人間は、王者としてふさわしい責務、行動をみずから自覚実践しなければならぬということになります。真の王者であるということは、いいかえれば自己の感情、欲望、愛情などにとらわれず、正しい価値判断にとめて、人間として万物それぞれを生かし、ひろく共同生活を向上進歩させようということです——』（注）この項については第Ⅲ節で詳述する。

——以上、五つ。僅か八百七十四字から成る提唱文（主文）の、それも前段の部分に宇宙の本質、人間の本質、人間の天命と使命に

ついでにの松下幸之助独自の見解を簡潔そのものの文言で盛り込んでいたのである。自ずと緊張度の高い提唱文となったゆえんだが、これに続く後段部分もみておこう。

●幸之助哲学の確立

これも区分してみよう。後段部分は前段と論調を一変した内容から始めていて、思わず襟を正すものとなっている。次の通り（別掲——『新しい人間観の提唱』参照。括弧内＝引用者）。

『このすぐれた特性を与えられた人間も、個々の現実の姿を見れば、必ずしも公正にして力強い存在とはいえない。人間はつねに繁栄を求めつつも往々にして貧困に陥り、平和を願いつつもいつしか争いに明け暮れ、幸福を得んとしてしばしば不幸におそわれてきている』

『かかる人間の現実の姿こそ、みずからに与えられた天命（注・前出）を悟らず、個々の利害得失や知恵才覚にとらわれて歩まん

とする結果にはかならない』

『すなわち、人間の偉大さは、個々の知恵、個々の力ではこれを十分に發揮することはできない。古今東西の先哲諸聖をはじめ幾多の人びとの知恵が、自由に、何のさまたげも受けずして高められつつ融合されていくとき、その時々々の総和の知恵は衆知となつて天命を生かすのである。まさに衆知こそ、自然の理法（注・前出）をひろく共同生活の上に具現せしめ、人間の天命を發揮させる最大の力である』

そして、次の一文をもつて提言文（主文）を結んでいる（括弧内＝引用者）。

『まことに人間は崇高にして偉大な存在である。お互いにこの人間の偉大さを悟り、その天命を自覚し、衆知を高めつつ生成発展の大業（注・大事業）を営まなければならない。』

長久（注・永久）なる人間の使命は、この天命を自覚実践することにある。この使

命の意義を明らかにし、その達成を期せんがため、ここに新しい人間観を提唱するものである』

ここで再度、結びの文言に注目したい。

それは「新しい人間観」を提唱した時点で、繁栄の哲学を基盤とする『幸之助哲学』が確固たる信念として確立していたことを示している。他方、そのことは同時に、その提唱が松下幸之助の二十余年に及んだ思索の結晶であること、さらに松下幸之助が満七十七歳の時に行なった提唱——提言であるということのもつ意味も考え直してみる必要があることを示している。

『経営の神様・松下幸之助』として世界に広く知られ、戦後の日本を代表する人物として、すでに半ば伝説化していた存在でもあった、松下幸之助をして、そこまで燃えさせたものは何であったのか。再度、深く考えてみる必要があるということだが、それはそれとして、やはり同じくもう一度深く掘り下げてみなければならぬことがある。次に、改めてみていくことにしよう。

Ⅲ 「新しい人間観」と哲学的真理

●「人間は万物の王者」とする考え方

松下幸之助が昭和四十七年八月、満七十七歳の時に発表した『新しい人間観の提唱』の最大の注目点は、その人間観にある。

再録しよう。次のように説いているのである（別掲——『新しい人間観の提唱』参照）。

『人間は万物の王者となり、その支配者となる。すなわち人間は、この天命に基づいて善悪を判断し、是非を定め、いっさいのもの存在理由を明らかにする。そしてなにもものもかかると人間の判定を否定することはできない。まことに人間は崇高にして偉大な存在である』

ちなみに、この松下幸之助ならではの人間観は、松下幸之助が月刊PHP誌（昭和二十四年七月発行号—二十八年十月発行号）に三十四回にわたって執筆・連載した「PHPの原理」についての論考ではじめて発表したものの

で、その折にもくり返して説いている（前号の小稿参照）。さらに、それらの一連の論考を下敷きにして月刊PHP誌第五十号（昭和二十六年九月一日発行）で『人間宣言——PHPのことば・その三八』として改めて発表している。

その時のことである。まえにみたように各界の知識人から「幼稚にして非論理的、かつ傲慢そのものの人間中心主義の独我論」と、辛辣そのものに批判され、散々にこき下ろされているのだ。

にもかかわらず、である。

松下幸之助は、稿を改めて発表した『新しい人間観の提唱』で再び同じ人間観を前面に打ち出しているのである。それも『新しい人間観』として打ち出し、それを提唱文＝主文の根幹に据えているのである。当然、それなりの理由があつたはずだ。まず、このことから再吟味していこう。

松下幸之助は、『新しい人間観の提唱』を発表した翌・昭和四十八年一月号の『ナショナル・マンスリー』誌で、その理由を明らかにしている。次の通り（以下、抜粋。一部の

字句を改訂。傍点、括弧内＝引用者。

「この提唱文は、二十数年前に一応のものをつくつて、P H P 誌にのせたことがあるのです。それから今日まで、いろいろ（再）検討を重ね、こんどの提唱文になったのです。したがって、ここへくるまでには二十数年かかっているのです。

ここでは、人間は万物の王者ともいえるほどに偉大なものであるということをいつているのですが、これまでの通念としての人間観というものはこういうものではないわけですね。一面では、人間は万物の霊長ともいっていますが、通念としては人間は弱きもの、欲深きものということで、崇高にして尊いというような人間観はありませんでした（注・前号の小稿（四）参照）。そこで、人間の本质とはそういう認識の仕方ではないのかどうか、ということから、いろいろ検討を重ね、いままでの通念とは反対の、新しい人間観というものを考えてみたわけです」

続いて、次のように語っている（抜粋。一

部の字句を改訂。傍点、括弧内＝引用者。

「『王者』とか『支配』とか『君臨』という言葉には（注・『人間宣言』を発表した時、これらの言葉が批判、非難の集中攻撃をうけている）、だいたい抵抗があると思いましたが、やはりこの言葉を使った方がいいと考えました。

というのは、まさに人間は王者（だから）です。

神を認識するのも人間で、犬猫では神の存在は認識できません。認識することとは、創造することにも通じるわけですね。こうした言葉を使うほどに高い視野に立った方がいいのではないかと考えたのです」

●松下幸之助の思考法と哲学的真理

松下幸之助の思考法の特色の一つは、素直な心で物事を正視し、真相を掴むというやり方、すなわち、いわゆる「如実如見」と「如実知見」の徹底実践にある。

「如実如見」——すなわち、つねに現実を正視し、あるがままの現実があるがままに見、見たくないもの、自分にとって都合の悪いもの

をはっきりと見定めて、決して目をそらさない。

次いで「如実知見」——すなわち、偏見や先入観にとらわれずに現実をありのままに正視し、何が真実で、何が真実でないかを自分の目で見定めている。加えて、一方で、できるだけ多くの人たちの見方や意見を聞き、それらを参考にしてもいる。しかし、それらの見方や意見に左右されることなく、あくまでも自分独自の視点から、考えて、考えて、さらに考えて、最善解と思われる結論を出す。

さらに、そのうえで小稿（三）で紹介した、やはり松下幸之助独自の「四諦論思考」と「五段階思考」をもって再度、検討し直し、そのうえで最終の判断をする。そして、その時に自ずと浮上してきた最終結論が時に、世間常識からみるとラジカルにすぎると映るものであったとしても、それが最終結論として手にしたものであるゆえに、かりに第三者から激しく批判されても決して撤回しない。信念をもって断断乎として主張し、実行に移す——。

これが松下幸之助の思考法であり、やり

方なのである。

新しい人間観―「人間は万物の王者にして支配者」とする見解もまた、その松下幸之助ならではの思索の、それも二十余年に及んだ思索の歳月の末に手にしたものであつた。

それは第三者からみると、あまりにも主観的にすぎる見解のようにも映る。しかし、だからといって、そのことが提唱文の欠陥点だということにはならない。

なぜなら、哲学思考の分野では、唯一絶対の正解というものは存在しないからだ。ましてや科学的にみて百パーセント正しい正解というものも存在しないからだ。

※哲学的真理とは究極において、個人の主観なのである。

また、哲学的真理とは究極において、一個の信念にほかならないのである。

さらにいえば、哲学とは自己が、人間が最善に生きることがために如何に生きるべきかを独自の視点で思考することであるからである。また、思想の本質は、現実を正視し、目の前で起きているところの、いっさいのものを容認したうえで新しい道、新しい未来を切り開

くための方策を追究し続けることにあるからである。すなわち、哲学とは本来、「実学」そのものでもあるのである。いわんや、一部の自称・思想家らにみられる、知識のための知識追究は、(これまた彼らが好んで口にする)哲学することでもなければ、思想するということでも決してない。

※哲学的真理 小稿では前号で記述したように、真理には、科学理論にもとづいて追究する真理Ⅱ科学的真理と、理性(道理)にもとづいて考えたり、判断したりする能力(と、心眼(事物の真の姿を鋭く見分ける心の働き)によって、はじめて理解し、掴みうる真理Ⅲ哲学的真理の、二つの真理がある、とする立場に立っている。

ここで再度、松下幸之助が提唱した『新しい人間観の提唱』へと戻ろう。

それは松下幸之助が二十余年に及んだ深い思索の歳月の末に手にした哲学的真理そのもので、第三者が軽々しく批判することを許さない深さと重さをもった内容となっている。いうなら松下幸之助そのものの。さらに、まえに木野親之が指摘しているように松下幸之助

が命と魂をこめて著述した文字通りの渾身の一冊というにふさわしい内容のものとなっている。

それでさらに先へとすすむと、松下幸之助は前述のように「第一章 宇宙というもの」「第二章 宇宙と人間との関係」と順を追って論考をすすめていて、その論考の中で彼が得た哲学的真理としての宇宙の本質と人間の本質を記述している。

●松下幸之助の「宇宙観」

まず、その「宇宙観」である。

松下幸之助が追究したのは、「秩序ある統一体としての世界―宇宙」の本質である。つまり、人間と万物のいっさいを含めた宇宙全体についての哲学的考察である。

松下幸之助は、その「秩序ある統一体としての世界―宇宙」を支配する法則とは何か、ということを追究している。そしてその結果として得た結論―幸之助流宇宙観にもとづく哲学的真理を「新しい提唱文」の冒頭で発表している。再録する。

次のように記述しているのだ。

『宇宙に存在するすべてのものは、つねに生成し、たえず発展する。万物は日に新たであり、生成発展は自然の理法である』

次いで「第一章 宇宙というもの」で、前掲の文言を補足・解説しているのだが、これも紹介しておこう。次のように述べている（以下、抜粋。傍点＝引用者）。

「宇宙万物いっさいは、つねに変化し、たえず流転しているのです。

そして、それはただ変化しているのでもなければ、もちろん衰退死滅でもありません。生成発展なのです。個々の姿をみれば、いのちあるものが死を迎えかたちあるものが滅びるといふことはあります。しかし、その滅びたものも、それだけにとどまるのではなく、それがまたつぎに新しいものを生むわけですから、古きものが滅び、それによってつぎつぎと新たなものが生まれ育っていくという、日に新たな進歩の姿が続けられているのです。（中略）

そのような万物の生成発展こそ、この宇宙の法則であり、自然の理法なのです。いいかえれば、たえず生成し、つねに発展しているというところに、宇宙の本質があるわけです」

この松下幸之助の論考と、それにもとづく見解は、「綜成的に見ればただ生滅変化あるのみ」とした、江戸鴨村の批判（前出）を乗り越えてのものであった。そのことはまた「新しい人間観」を発表した時点で、松下幸之助が自分の考察と推察に絶対の自信（信念）を有していたことを示してもいる。当然のこと、その「宇宙観」にもとづく「人間観」もまた独自の高い視野から考察して得たものであった。これも抜粋して紹介しよう。

松下幸之助はまず、「第一章 宇宙というもの」の中で、「人間の誕生もまた、宇宙の生成発展の所産である」と述べたあと、「第二章 宇宙と人間との関係」の中で、次のように記述している（傍点、括弧内＝引用者）。

「そもそも人間というものはこの地球上にどのようなにして発生したのでしょうか。この問

題については学問的にもいろいろ研究され、さまざまな説（注・「ダーウィンの進化論」その他―前号の小稿参照）がたてられています。しかし、いずれにしても、われわれはそれを実際にこの目でたしかめることはできません。今日の人知においては、いろいろと研究の成果を参考としつつ、推測によってこれを決定する以外に方法はありません」

●松下幸之助の「人間観」

次いで、松下幸之助が「人間発生以来」の人間の歴史を独自に考察・推察して得た人間観を記述している。その内容が興味深い。まず、次のように述べているのだ（以下、「第二章 宇宙と人間との関係」より抜粋。括弧内＝引用者）。

※前号の小稿でみたように、松下幸之助は「ダーウィンの進化論」に与することを強く拒否。昭和二十年代に「人間はサルから進化したものではない。人間は神（注・宇宙根源の力）によって、創造主によってつくられた。人は、初めから人間として生まれた。人間は、初めから人間なのである」とする見解を発表していた。

「当初においては人間が人間を生んだのではなく、自然の理法というものが人間を発生せしめたと考えられます。（中略）（地球上に）人間を発生させる諸条件が整った時に、地球の各所で発生したのですが、ある期間がたった後ではその条件はうつり変わってしまったわけです。それ以後は人間が発生するということはなくなりました。しかし、人間は人間を発生させた自然条件によって、自生作用といえますか、みずから子供を生み、種族を存続させる能力というものを与えられました」

「ただ忘れてならない大切なことは、人間の本質なり、特性といったものは、最初に人間が発生した時に、人間を生みだした自然の諸条件によってすべて与えられていたということです。（中略）いいかえれば、人間ははじめから他の生物とは異なった、人間としての独自の本質を持ってこの地球上に発生したわけです。そして、その人間の本質というものは、親から子へ、子から孫へとつぎつぎと受けつがれ、今日まで変わることなく一貫して続いてきているものなのです」

そして、これに続く部分で注目の「人間は万物の王者である」とする、松下幸之助ならではの人間観を打ち出している。これも抜粋して紹介しよう（括弧内＝引用者）。

「それでは、そのような人間の本質、人間を他の万物いっさいから区別する特質とはどういうものでしょうか。

それは、一言にしていえば万物を支配活用する王者としての素質を発生当初から与えられているということです。いいかえれば、万物それぞれに与えられている本質を十分発揮させながら、それを人間みずからが活用できるということです。（中略）

人間は、みずからの知恵のはたらきによって、生成発展しつつある万物とそれを動かしている自然の理法を、逐次認識していくことができる本性（注・前出）を持っています。そして、ただ単にそれを認識するというだけでなく、さらに進んでは、その（自然の）理法にしたがって万物をみずからの生活の上に生かし、活用することによって、ひろく共同生活を高め、物心一如の調和ある繁栄を招来

することもできるのです。

これは人間だけがなし得る偉大なわざであり、人間以外の生物がそういう知恵を持たないままに、もっぱら本能のみによって生きているのとは全く異なっています。そういうことは、それぞれの万物が発生した時の自然条件によって与えられた、いわば自然の鉄則であり、われわれはこのことを正しく認識しておく必要があると思います」

さらに別記して、次のように述べている（傍点、括弧内＝引用者）。

「このような特質がなぜ人間だけに与えられ、他の万物には付与されていないのでしょうか。それは、人間には答えることができませんし、問うこと自体が無意味であると思います。というのは、これは人間自身の意志とか意欲とかを越えたものであって、天地自然の理とでもいえますか——それは神とも宇宙の根源力ともいえますが——ここでは自然の理法によるものと考えられるからです。いいかえれば、この特質は人間が自然の理法に

よって与えられた天命（注・前出）ともいうべきものなのです」

● 仏教の人間観と「新しい人間観」

前掲の松下幸之助ならではの、ユニークそのものの「宇宙観」と「人間観」は、前出のこれまた松下幸之助ならではの「如実如見」と「如実知見」を基本にした徹底思考で得たものであった。

いい換えると、松下幸之助はわれわれが現在生きているところの世界をまず正視してその中から真実とされるものを掴みとり、さらに宇宙と、地球、人間発生以来の歴史を深く考察して、そこから自然の理法を掴みとっているのだ。これは、つねに「現実を第一の教科書として学ぶ」とする、これまた松下幸之助ならではの姿勢でのものであった。それでもう一つ、やはり見落としてならないことがあった。

松下幸之助の「新しい人間観」の追究は、通説とされてきた人間観、なかんずく「人生苦説」を説く仏教の人間観に対する疑問と強い反発からスタートしたものであったので

ある。これについては前号の小稿（四）でもふれたが、ここでは仏教の人間観そのものについて改めてみていくことにする。

「人間とは何か」。「人間の在り方とは何か」。これは前号の小稿でもふれたように古来、人びとがくり返してきた第一の本質的な問いで、宗教の世界でもくり返して問い直されてきた。仏教の世界でも同じ問いがくり返されているが、仏教思想では古来、「人間と自然は平等である」とする考え方をもつて基本としていて、それは現在でも変わらない。改めて仏教思想における人間観をみよう。

安原和雄（足利工業大学名誉教授）は、『二十一世紀と仏教経済学と（上）』（『仏教経済研究・第三十七号』—平成二十年五月、駒澤大学仏教経済研究所刊）で次のように記述している。

「現代経済学の理論体系に『いのち』の観念はない、無視していると言ってもいい。

仏教のいのちの尊重とはなにを含意しているのか。まず生命尊重（『生命中心主義』）と人間尊重（『人間中心主義』）とは質的に異なる。

っていることを指摘したい。

仏教思想でのいのちとは人間に限らず、地球上の生きとし生けるものすべてのいのちを指している。人間も動植物も平等であり、人間だけが格別上位に位置しているわけではない。これが仏教思想の生命中心主義であり、平等観である。これに対し人間を万物の霊長として自然、動植物を支配する地位に押し上げているのがキリスト教的人間中心主義といえる。キリスト教の世界である欧米では生きとし生けるものすべてのいのちではなく、『人間のいのちの尊厳』がしばしば強調される」

そして別記して、次のように記述している（抜粋）。

「インドの大乗経典の一つ、大般涅槃経は、『一切衆生、悉有仏性』（生きとし生けるものすべてに仏性がある、という意）を説いた。また中国や日本の仏教は、これに加えて『山川草木、悉皆成仏』（山川草木ことごとくみな成仏する、という意）と説いている。

仏教にみる、この人間観、自然観は仏性、すなわちいのちを軸として人間と自然界の動植物の間のつながり、相互依存関係をとらえようとするものであり、これは人間と動植物をそれぞれが平等、対等の関係にある共生のシステムとして認識することにほかならない。いいかえれば動植物を含む自然は人間が支配し、利用する対象として存在するのではなく、相互に同価値として存在しているのであり、先に述べた仏教の生命中心主義はすなわち仏教の共生観を意味している。

つまりすべてのものが相互依存関係にある。それぞれの人生を考えてみても、自分ひとりで生きているのではない。宇宙、地球、自然、社会、地域、家庭そして他人様のお陰で生かされ、生きているのである。いいかえれば他存在、他者との共生以外にそもそも生ものちも、そのありようがない」

●「新しい人間観」にこめた幸之助の想い
いままた仏教思想における人間観は、古来、連綿として説き継がれてきたものの一つでもある。むろんのこと、松下幸之助は知っている

たし、さらに理解してもいた。にもかかわらず、松下幸之助は反仏教的な、かつキリスト教的人間中心主義をも大きく超えたところの自説——「人間は万物の王者であり、支配者である」とする『新しい人間観』を前面に強く打ち出しているのだ。それも二十余年前に、傲慢かつ独我論的なものと散々に批判されたものを改めて提唱しているのである。当然、それ相応の理由があったはずだが、実は、そのことについては前掲の提唱文（主文）中でも述べているほか、「序章 なぜ『新しい人間観』を提唱するのか」の中でも補足・説明をしている。

まず、提唱文の後段で述べているものからみる。次のように述べているのだ（抜粋）。

『すぐれた特性を与えられた人間も、個々の現実の姿を見れば、必ずしも公正にして力強い存在とはいえない。人間はつねに繁栄を求めつつも往々にして貧困に陥り、平和を願いつつもいつしか争いに明け暮れ、幸福を得んとしてしばしば不幸におそわれてきている』

それで補記すると、この哀しいまでの現実には、実は松下幸之助が僅か九歳、小学校四年生の時に貧困ゆえに一家離散へと追い込まれ、母親の許をも離れて大阪・船場へ丁稚奉公に出た時に身をもって知った実社会の実相でもあったのだ。

なぜ、人は繁栄を求めつつも逆に不幸に襲われるか。なぜ、人は平和を願いつつも反対の、争いに明け暮れる日々へと追い込まれていくのか。なぜ、人類の歴史にいまわしい戦争が絶えないのか。人はどのようにしたら真の幸せを手にするのか……。幸之助がまだ年端もゆかぬ身で、必死に求め、その後も長年の間もがき苦しみながら必死に求め続けてきた問いの答え——。それが松下幸之助が満七十七歳の時についてに手にした、「新しい人間観」であったのである。

改めて、「序章 なぜ『新しい人間観』を提唱するのか」の中で述べていることをみよう。松下幸之助は、次のように述べている（抜粋）。

新しい人間道の提唱

人間には、万物の王者としての偉大な天命がある。かかる天命の自覚に立っていつさいのものを支配活用しつつ、よりよき共同生活を生み出す道が、すなわち人間道である。

人間道は、人間をして真に人間たらしめ、万物をして真に万物たらしめる道である。

それは、人間万物いつさいをあるがままにみとめ、承認するところからはじまる。すなわち、人も物も森羅万象すべては、自然の摂理によって存在しているのであって、一人一物たりともこれを否認し、排除してはならない。そこに人間道の基がある。

そのあるがままの容認の上に立って、いつさいのものの天与の使命、特質を見きわめつつ、自然の理法に則して適切な処置、処遇を行ない、すべてを生かしていくところに人間道の本義がある。この処置、処遇をあやまたず進めていくことこそ、王者たる人間共通の尊い責務である。

かかる人間道は、豊かな礼の精神と衆知にもとづくことによつてはじめて、円滑により正しく実現される。すなわち、つねに礼の精神に根ざし衆知を生かしつつ、い

「文化が進み、文明が発達してきたにもかかわらず、人間は同じような不幸をくり返している、というよりも、文明の進歩に反して不幸が大きくなつてきている面さえみられるわけです。」

なぜこのようなことになるのでしょうか。

一つには、人間というものは結局そういう宿命を持つているのだという考え方があります。ある面では進歩を生みだしながら、他方ではたえず争いをくり返し、みずから不幸を招来している、それが人間の本来の姿なのだとする考え方です。

もし、そういう考え方に立つならば、お互いがいかに研究し、努力したとしても、しよせん人間生活の上に、真の幸せというもののはもたらされず、人間は調和ある繁栄とか平和、幸福を望

みつつも、それをお互いのものにすることができないということにもなります。

しかし、はたして人間とはそのように、つねに弱く愚かなものでしょうか。それが人間の本質なのでしょうか」

そして、その熱い想いを次のように説き、訴えているのだ。

「そうではない、と思います。」

人間の本質はもつとほかにある、人間は本来もつとすぐれたものである、調和ある繁栄、平和、幸福を実現し得るものである、ただそこにそれなりの原因があつて、いまだなおその立派な本質を十分にあらわすことができないでいるのだ、そういうことを十分に認識し、人間の本質を正しく自覚するならば、人間の共同生活は必ず好ましいものになるのだ、と。そう思うのです。

なぜ、そのように考えられるのか。その本質をどのようにすれば発揮できるのか。それについて一つの考え方を示したのが、この『新しい人間観の提唱』なのです」

つさいを容認し適切な処遇を行なっていくところから、万人万物の共存共栄の姿が共同生活の各面におのずと生み出されてくるのである。

政治、経済、教育、文化その他、物心両面にわたる人間の諸活動はすべて、この人間道にもとづいて力づくよく実践していかなければならない。そこから、いつさいのものが、そのときどきに応じ、そのところを得て、すべてが調和のもとに生かされ、共同生活全体の発展と向上が日に新たに創成されるのである。

まさに人間道こそ人間の偉大な天命を如実に発揮させる大道である。ここに新しい人間道を提唱するゆえんがある。

昭和五十年一月

松下幸之助

補記すると、右の松下幸之助の一文は、「人間は自然の中で一番弱いものである」とする、仏教僧侶たちへの批判もこめられている（前号の小稿参照）のだが、これに関連してもう一つ補足しておきたい。

● 仏教界の宗教観と幸之助の宗教観

宗教観

「繁栄によつて人類の平和と幸福を」。松下幸之助がダイナミックそのもののPH P理念を掲げて、PH P研究所を創設したのは小稿（一）（二）でみたように昭和二十一（一九四六）年十一月三日、五十一歳の時のことであつた。しかし初期PH P運動の段階では人びとの理解と支持を得ることができず、たとえば大阪や門真の駅頭でPH P運動普及のためのビラ配りをした時もビラを受取らない人たちが数多くいた。そこで松下幸

之助は宗教界の支持を得るべく、翌二十二年の三月と五月に京都の東本願寺と西本願寺で長老と僧侶の前にして講演を行なっているが、この時の反応もまた期待に反したものでしかなかった。

まず、松下幸之助がその時に語ったものか

らみていこう。次の如きものであつた（以下、PH P史料―「京都・西本願寺講演記録」より抜粋。括弧内、傍点〳引用者。一部の字句を改訂）。

「敗戦で荒廃した」わが国を本当に建て直すには、どうしても心のゆたかさと物の豊かさを持たねばならない。それを目標に研究し、運動しているであります。物心一如の繁栄を招来しなくては相ならぬと思うのであります。うち、物の面につきましては政治と経済の改善によつてこれを解決していく。（他方）心の面は宗教の興隆によらなければならぬ、と考えているのです。（中略）（一方）現在ほど宗教が低調な時代はない、と思うのであります。

宗教の低調が心の貧困を招来している大きな原因の一つではないか、と思うのであります。それでPH P（注・PH P理念〳「繁栄によつて平和と幸福を」）を実現するには、どうしても宗教を真に興隆させなければならぬ。どうしても、これは宗教団体のお立場におられる方がたの蜂起にまたねばならない。実は、かように考えているのであります」

これに対する僧侶たちの反応である。

松下幸之助の、一見、宗教界批判にも映る発言に反発したということであつたのかも知れない。質疑応答へと移つても質問はゼロ。冷やかな態度に終始している。それで講演を終えたあと、席を変えて長老らと懇談した時のことである。一人の長老が松下幸之助の無知を論ずかのように次に語つたのであつた（以下、佐藤悌二郎著『松下幸之助・成功への軌跡』より抜粋。括弧内は引用者。一部の字句を改訂）。

「実は、宗教（注・仏教）というものは生死観を究めるといふことが本来の目的なんです。むろん、現在の世相を救うという仕事も大事ですが、生死観が究められたら悟りが開けるんです。悟りが開けたら自然に人間の生活も静粛になつてくる、現在の物情騒然とした世の中というものも治まつてくるんです。いま、われわれが巷に立つて人心の救済を叫ぶのもそれはそれで結構ですが、それ以上に生死観を究めるといふことが大事です。あな

たのおつしやることもわかりますが、宗教のほんとうの使命というものは生死観に対する悟りを得さしめることなんです」

長老の言葉は、「宗教（仏教）の本義は、信仰によつて天命を悟り、心を安らかにして生死をも超えること」、すなわち主観的安心立命を究めることにあるということを説いたものであつた。そして、その言葉はまた、PH P運動へ参加することは、仏教の本義に反するものであり、ゆえに松下幸之助の協力要請に応じかねるということを言外に伝えたものでもあつた。

両者の宗教観が根幹から、大きく異なつていたのだ。

松下幸之助が考えていた宗教は、主観的安心立命の追究を基盤としたものではない。それは個々の、一人ひとりの主観的安心立命といふことを大きく超えたかたちでの宗教と人間の関わりを基盤としている。かくして松下幸之助の講演は宗教観の違いを確認しただけで終つたのだが、これをどうみるか。

率直にいおう。さきの長老の言葉は、かつ

て祖師たちが理想社会の建設を目指して命を賭して戦つた時代が続いたことを忘れての、逃げの姿勢とそれゆえの自己弁解にすぎない。方便仏教、葬式仏教に堕した者の言葉でしかない。

松下幸之助がその後、さらに思索を重ねたあとで改めて『新しい人間観の提唱』をしたゆえんでもあつた。

なお、松下幸之助は「人間を考える——新しい人間観の提唱」に続いて、昭和五十年一月にその実践を説いた『新しい人間道の提唱』（別掲）を発表している。さらに昭和五十七年八月に、『人間を考える第二巻 日本の伝統精神・日本と日本人について』（PH P研究所刊）を上梓している。いずれも純日本人・松下幸之助の国を想う熱情あふる著作であるが、小稿では紙幅の関係上、それらについての考察を割愛した。（敬称略）

※次回（第6回）——「無税国家論」から「松下政経塾」へ。

（あおの・ぶんさく 経済ジャーナリスト）